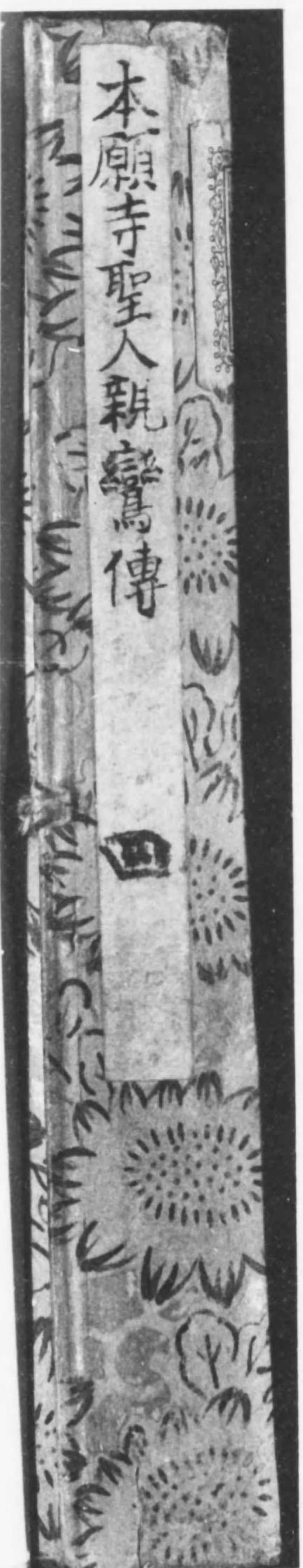


始



318
4
92

聖人東園の瑠法にて、華徳の終

小おもしろくも是れ或日暇法

りとししく箱根の法理よの、

りけり遠行者の能と送て御

人屋れ極にらつて、一夜も改

修更と及く月もけり孤獨小

るゆゑのす時聖人あゆみより

つ東園とよふよ満るとに此頃

をれ静のうれしく家来たる

かいと、こころもあひをてまう

て云やう社廟らるる所のなりは

つも東国と云ふふも南とに此頃
 され南の方れりく装束など
 かいとこころもあひをてまう
 て云やう社府ら此所のなひ並
 され終末あつひいゆるもまされ
 しよりけりゆるるるん神もあ
 井いしそるる思程り夢りし
 何とせうけい山もあて権謀致
 作ふ今も後言致と云ふ人さ
 客人の終儀をせしぬそはし
 わも必懸熱の志長を抽て殊丁
 軍代惣警應と飲るることゝ未
 いた身ととりまふ小貴清茶
 として乾向したまへり何そ句
 人小浦りまひし神勅乞極言也
 感存一最恭敬すことく尊を添
 請しをてまはりくまへり一餐
 誠懐いらく小味味と調り





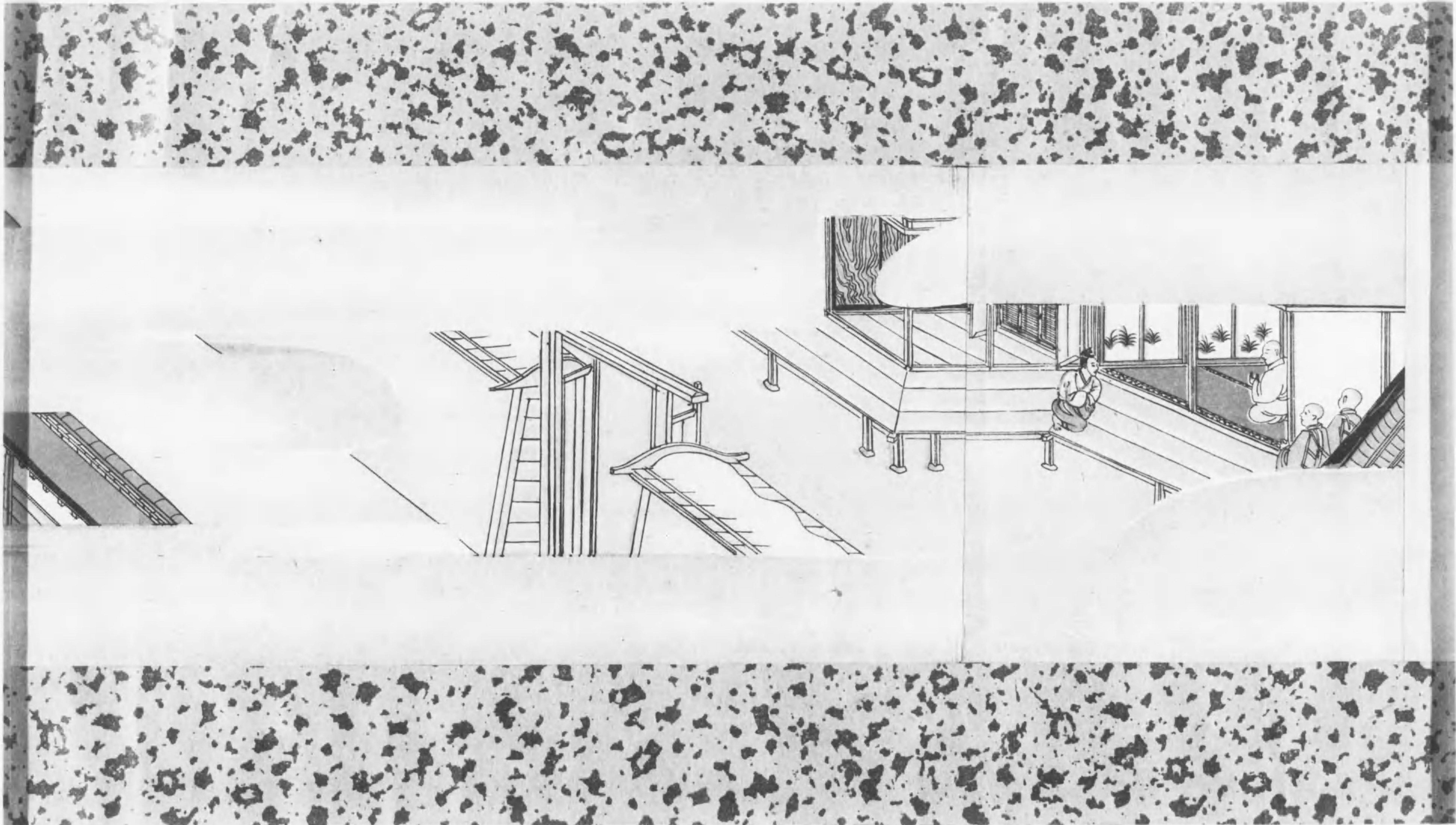
聖人の郷小幡く江幸とて
 二年の歳夢のこころ幻れ
 心へ長女洛陽の橋もわかれ
 としる水々く枝風馬湖と
 りくし福住しをまじり糸
 西洞院わたり二礼一の勝地をも
 少て志けく心をしえしぬ
 余此の如く一日次とてはへ面受
 以て道一門徒等とれく始はす

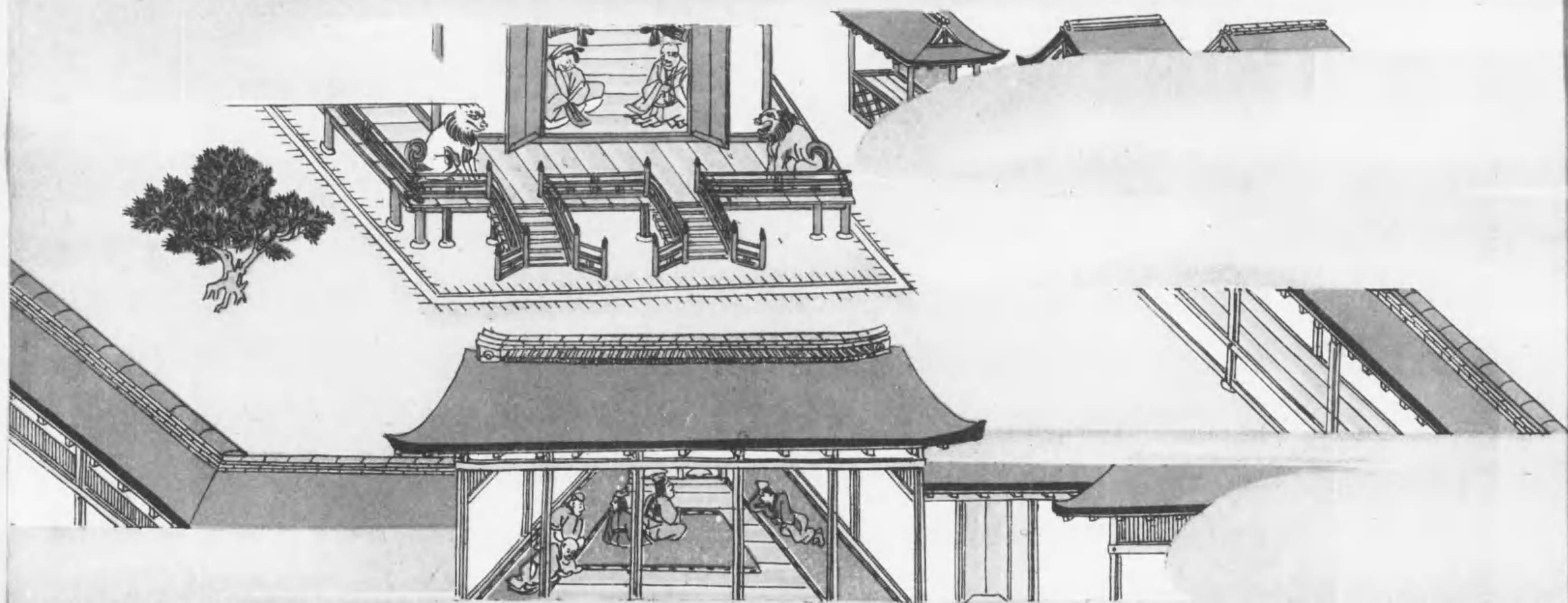
八巻上巻の巻末に二二八

西洞院なり。此一の勝地なり
少くもはくみせし見よ
余此の如くへ口次とほへ面受
以道一門徒等とれく如法寺
以路を尋て春集一合をけ
と地乃、乃昔陸園那行西郡大
勃郷一平太郎が小のりとし
彦民あり聖人の訓と信しく
吾戴なりきさる感時伴平を
一所勢小返きて能跡よ訪ゆ
とて事此の志を助中ししを以
小聖人へまじり多々に被仰云
夫聖教の可卷なりといふ事し横
相應とれは巨益あり但ま法の
今阿室道門の修行よと地てと
賦守多る路は中より我來法
時中一徳、衆生起行修道を為
一人清者といひ唯も浄土一門
可通入路也。此皆経釋に明文
如來の金言也。今唯有浄土の法
教に就て春彼三國に祖師に
のく、この一案と興行と一所以
愚禿勸れと、乃更もさる
なりある小一向を念に義に經
主に肝腑自宗の骨髄也すを
ら三粒小徳顯ありといひも文と
いひ教也の元世にもて明なり

なりある小一向者念は義は從
まは肝腑自宗の骨目せすも
ら三強小徳顯ありといひども文と
いひ教の元世にして明なる
と大經の三輩しと一向と勤
く通ははこれと陳勅は付角志
觀經の九品小もくけく三心と
説く是又阿難は付属と小經の
一心はの諸佛の徳と説く
これ小も論主一心に判し和尙
一向は釋すあまはこれ花何
の文もも一向專修は教と
立る處しあるとや諸説あり
地すかちこの教主なりわりの
以小もを念くもくも念まよ
法縁はも海とて海とこにとも
て和光の善説は面をもも善説
とくしは私意多、縁縁の群
類はして融海小引入勢しと也
あつしはは他は権願を信し
く一向も念佛はこもせん華
公勢しとあつしは領事しと也

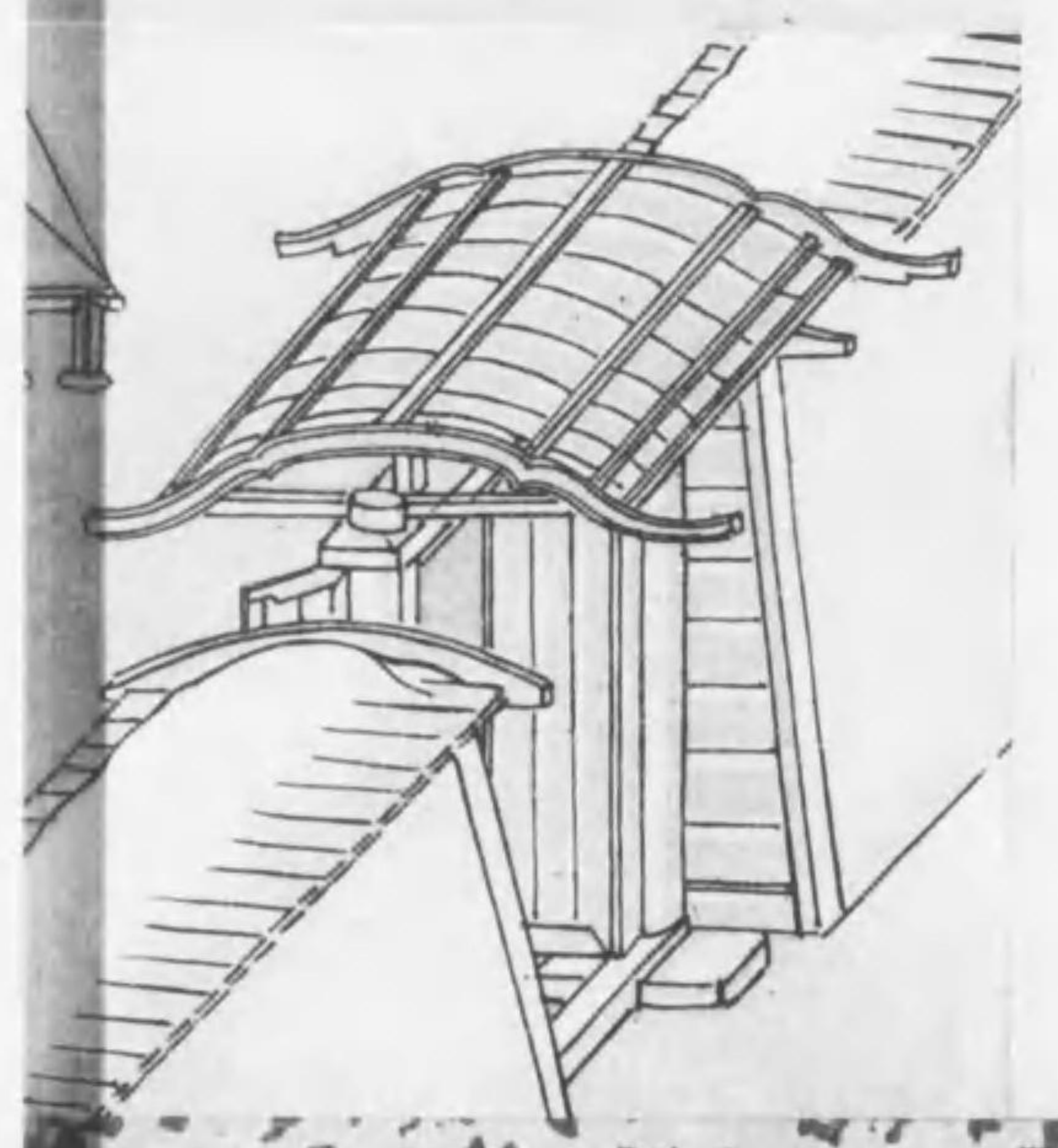


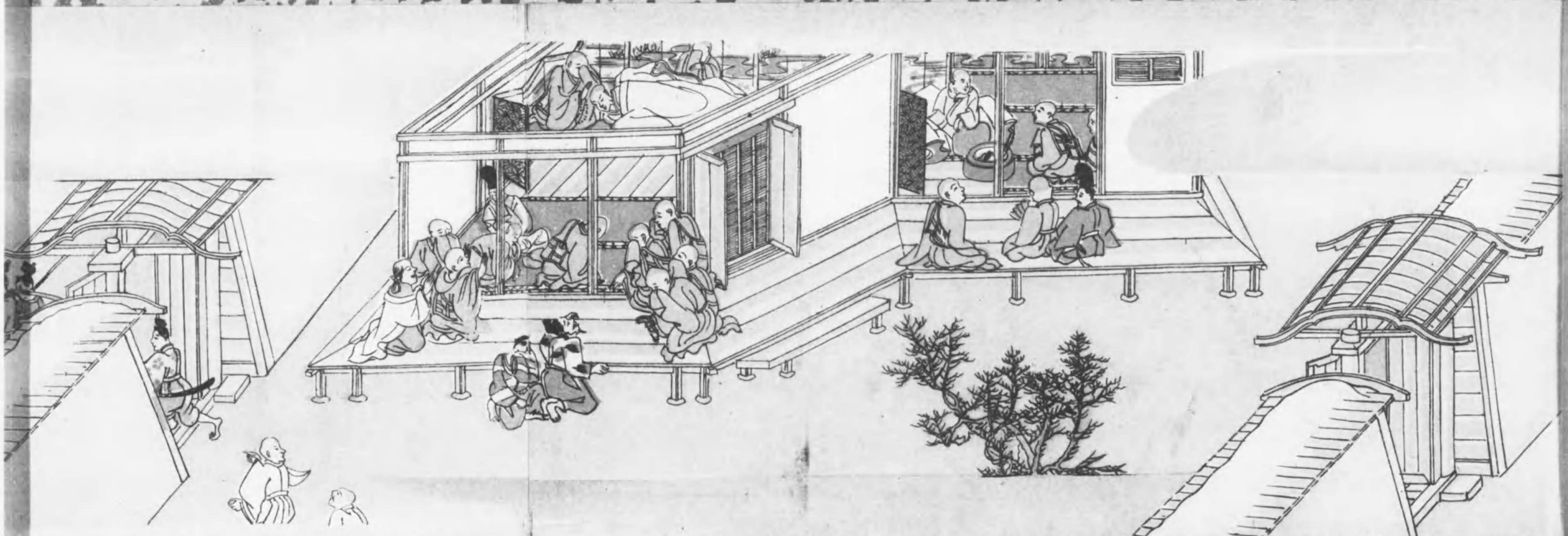




聖人弘長二歳^壬仲冬下旬の儀
もいふく不例に氣をいす
自承の事は小世事とゆふ

聖人弘長二歳^壬仲冬下旬の儀
 といふこと不例に氣うて予
 自承の事口小世事と仰るを
 多し佛恩の仰る事と仰る
 輝々鮮云をわくはあはれ
 梅名をゆかると仰る事
 同弟八日^午頭北面を右脇に
 てつ中より念仏此息してを
 以て時頼於九旬満たると禪坊
 には女馮湖の邊^{押上南} ^{五里} ^{かしの}
 小河東の跡と居て洛陽東山
 此西蘇島の跡の南を延仁寺
 葬してきて下は遺骨を拾
 て同山麓をP聖の山邊大谷
 へ終にたよめをいぬる終焉小
 ありの事勅化とうけし老る各
 五世にいふに急流おひかた
 望むをのぞいて見えて慈慕涕泣せ
 と仰ふこと



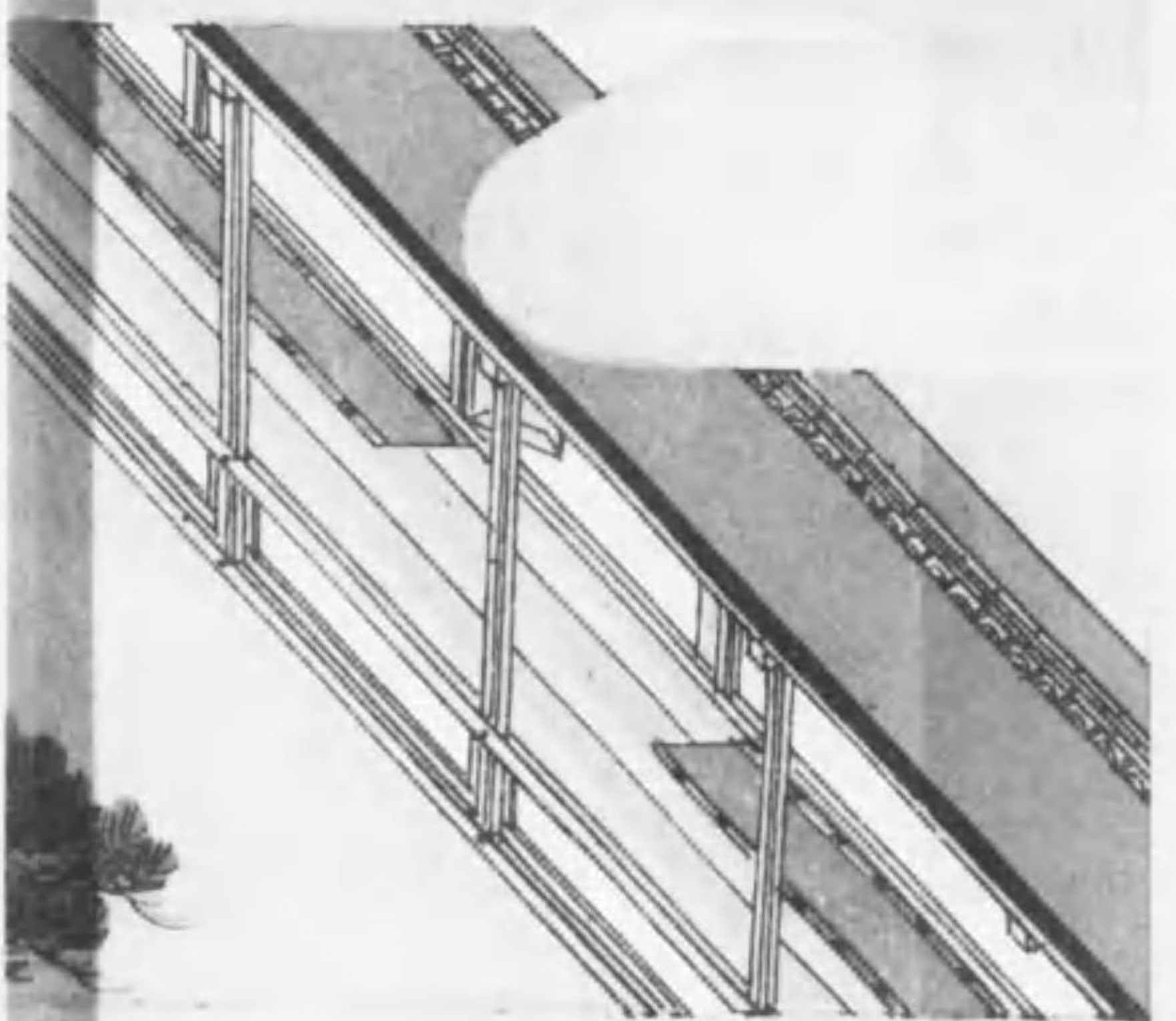


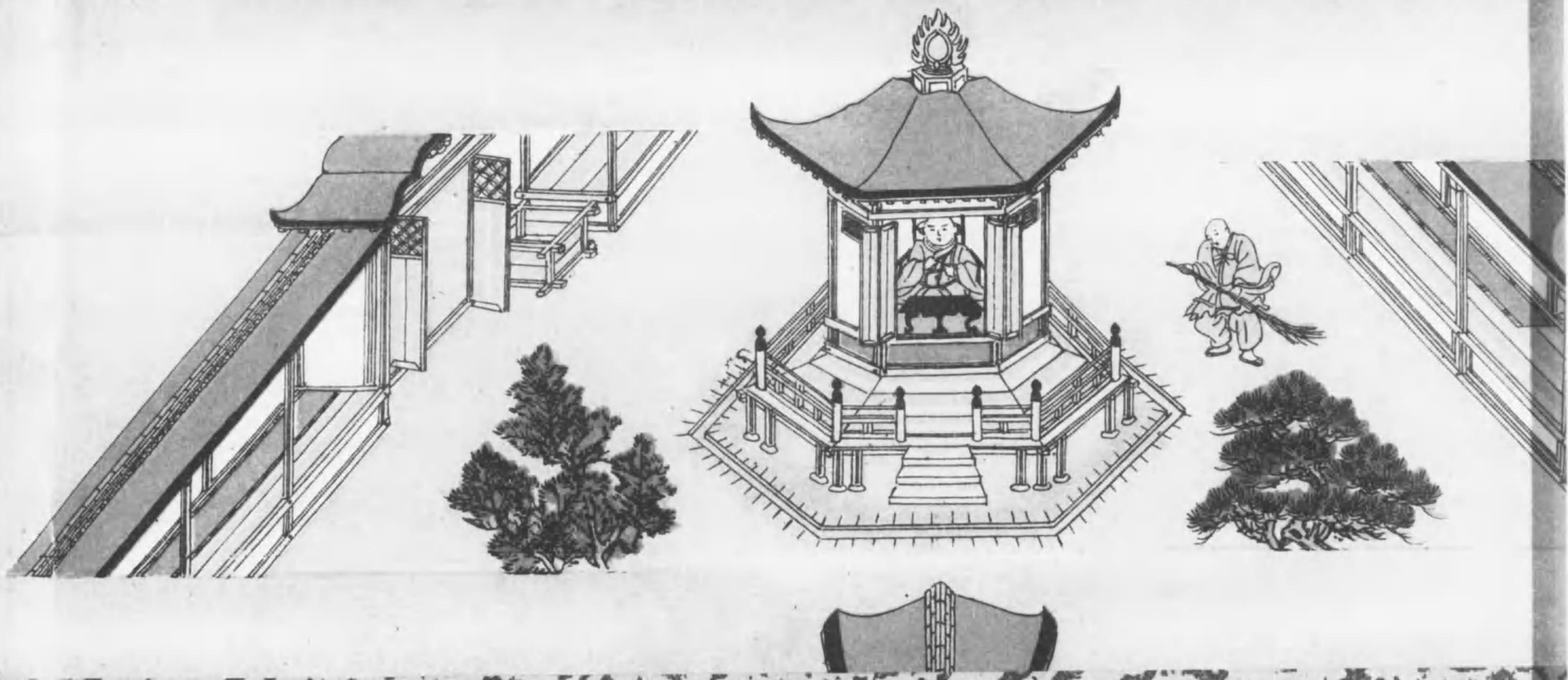
七十九年八月廿一日 西條寺





文永九年冬比叡山為蘇島郡
 野の小大谷に墳墓をわくめ
 て同麓より西吉水乃北を
 へり遺骨と垢液く佛骨をそ
 て形像と安す此町。當之の聖人
 相傳の意義いよく興し遺訓
 まこと感ずること永在せし昔
 丹超よりす冬く門葉園部ニ
 死満し未流すに遍布して
 幾千万といふ事を一し以て其東
 教と重して彼報謝を極るも
 了端意老が面く小あを女候
 運く多く廟臺に指す凡聖人
 在生乃同身特これありて
 いふくも羅婦に違わすま
 いかくは此後と略す可也





報令園書云

右塚起畫面之志偏為知恩報德
 不為戲論任言刺又深世毫指翰
 林其幹尤枯其詞身一尚付真何
 有痛方取雅於一漏後是舒否

根令園書云

右塚起畫面之志偏為知見報德
不為戲論任言割又深此毫指翰
林其粹尤指其詞是為付真何物
有痛方取雅此以漏後其好言
之恥根無顧當時思素之誠終
之

于時永仁弟之唐應鏡中句弟
二天至彌時終草書之篇手

執筆者人如

畫工根津

明治三十六年 廿四日印刷
同年 同月三十日發行

發行兼編輯人 康樂寺復興會
右代表者 堤 又治郎
東京市神田區表神保町四番地
印刷者 岡村竹四郎
東京市麹町區有樂町三丁目番地
印刷所 信陽堂
前同所

終